

第13回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練  
被災者・被災地の多様な困りごとと支援者がつながる  
～事例から気づく 今からできること～

報告書

開催日：2018年1月20日（土）・21日（日）

会場：ツインメッセ静岡 西館 第1・第2小展示場



1日目ワークのようす

主催：特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会  
共催：静岡県、社会福祉法人静岡県社会福祉協議会・市町社会福祉協議会  
協力：一般社団法人静岡県労働者福祉協議会、公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会、  
連合静岡、静岡県労働金庫  
実施主体：特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会、第13回図上訓練ワーキンググループ  
協賛：ガイドドリンコ株式会社、株式会社伊藤園、エム・ビー・エス株式会社  
助成：日本財団

# 静岡方式の図上訓練とは？

この訓練は、被害想定から対応を検討する「シミュレーション型訓練」ではなく、与えられた問題の解決策を検討する中で、その問題と問題を抱えている地域への理解を深め、予防や人材発掘、ネットワークづくり等を広く深く考えようという「ワークショップ型図上訓練（頭で考える頭上訓練とも）」です。

平常時から静岡県内外の災害ボランティアと関係者が信頼関係の構築と情報交換を行ない、市域、県域、県外との「つながり」を意識した支援体制づくりを図るため、東海地震を事例に静岡県内外の人たちが共に考える機会として始まりました。県外からの関係者も多く参加していることから、広域災害時の「受援」を意識した訓練として、全国的にも注目されています。

13回目となった今回の訓練は、南海トラフ地震で静岡県内の複数市町が被災したことを想定しました。被災者・被災地には様々な困りごとがあり、その困りごとを解決していくためには、災害ボランティア本部（災害ボランティアセンター）だけではなく、多様な支援者がつながることが欠かせないことに気づき、次のアクションにつながられるようになることを目的に行いました。

### 参加者の主体性が生む成果

- ・何よりも県外の多様な地域からの参加者と知合いになり、**新たなつながり**が生まれている
- ・訓練を通して知り合った仲間同士が日常的に連絡を取り合うようになり、**お互いの地域の防災訓練等に参加する**などの動きにつながっている
- ・参加者属性も被災地支援や地域防災等に偏らず、多様な分野の参加者が「図上訓練」をキーワードに集い、日頃からの**顔の見える関係づくりに**寄与している

### どんな訓練？（財源）

開催(年度)	財源	共催・協力
第1回(2005)	静岡県の委託事業	
第2回(2006)	+	
第3回(2007)	静岡県ボランティア協会の自主事業	
第4回(2008)		
第5回(2009)		
第6回(2010)		
第7回(2011)	公益財団法人	
第8回(2012)	静岡県労働者	
第9回(2013)	福祉基金協会の委託事業	
第10回(2014)		
第11回(2015)		
第12回(2016)		
第13回(2017)	(公財)日本財団の助成事業	

第6回訓練の5日後に東日本大震災が発生

- ・静岡県
- ・静岡県社会福祉協議会
- ・県内市町社会福祉協議会
- ・静岡県労働者福祉協議会
- ・連合静岡
- ・静岡県労働金庫
- ・ダイードリンク
- ・伊藤園
- ・NTT西日本静岡支店

第13回訓練は、日本財団の助成を受けて実施しました。第4回から12回までは（公財）静岡県労働者福祉基金協会の委託事業として実施しています。

## 参加団体・参加者数

	参加団体・機関	参加者数(人)
県内	85	217 (25市町・県)
県外	49	96 (14都府県)
計	134	313

\*企画ワーキンググループ、事務局等の関係者を含みます

### どんな訓練？（参加者数）

参加者数	県内	県外	見学・ビジター	その他	合計	プログラム企画
第1回	102	24	25	31	182	訓練世話人会
第2回	72/80	36/46	9/12	23/24	302	訓練世話人会
第3回	108/115	57/57	18/14	22/40	429	訓練世話人会
第4回	164/169	89/88	4/4	33/37	588	ネットワーク委員会
第5回	206	83	17	35	335	県外若手有志
第6回	162	74	14	49	297	ワーキンググループ
第7回	193	90	21	39	343	ワーキンググループ
第8回	219	117	7	80	423	ワーキンググループ
第9回	176	119	41	85	421	ワーキンググループ
第10回	155	71	54	54	334	ワーキンググループ
第11回	127	60	55	67	309	ワーキンググループ
第12回	135	60	54	64	313	ワーキンググループ
述べ	2,183人	1,071人	349人	683人	4,273人	

プレセミナー資料より

13年間に約4,600人の方が参加しました！

## 参加者

### 【対象者】

個人ではなく団体・組織を参加の対象とし、2日間の参加を原則としています。参加者の所属は、ボランティア団体、市民活動団体（NPO・NGO）、社会福祉協議会、中間支援組織、民生委員・児童委員協議会、行政機関、大学（学生サークル等）、士業団体（弁護士会、行政書士会）、企業・業界団体、労働組合・協同組合、福祉施設、当事者団体、青年会議所など、多岐にわたりました。

また、参加者が2日間のプログラムに積極的にに関わり、訓練が地域での次のアクションにつながるものになるよう事前課題を設け、必ず学習してくることを参加の条件としました。

### 【参加のしかた】

ワークプログラムに取り組むプレイヤー参加と、訓練の見学及び特別プログラムを通して本訓練のねらいや考え方を学ぶビジター参加の2つがあります。ビジター枠は、訓練初参加の方や災害ボランティア以外のさまざまな分野で活動する団体・組織の人たちも参加しやすいように設けました。

# プログラム

## プレセミナー

### 「図上訓練って何？」～静岡式図上訓練12年のあゆみ～

初参加者が訓練に入りやすくなるよう、訓練に先立ち静岡式図上訓練の解説や過去の訓練の様子を知ることができる自由参加型のセミナーを行い、100名近い人たちが参加しました。これまで訓練に参加したことのある方々の関心も高く、訓練への理解を深めてもらうことができました。



- 【解説】 岩田孝仁氏（静岡大学防災総合センター長 教授）  
小村隆史氏（常葉大学富士キャンパス社会環境学部 准教授）  
【進行】 松山文紀氏（震災がつなぐ全国ネットワーク 事務局長）

## 訓練の目的や県内の体制等の共有

今回のワークプログラムの目的を共有するとともに、この訓練は参加者全員で作り上げていく訓練になっていることを確認しました。また、静岡県内で大規模災害が起こった際に考えられているボランティア活動支援体制と、南海トラフ地震の被害想定を広域の視点で理解し共有するための時間を設け、静岡県全域がどのようなイメージしました。



## ワークプログラム

### ワークプログラム1 「避難所支援を事例から学び、平時のつながりを考える」

1日目のワークプログラムでは、災害時の避難所をテーマに被災者（避難者）支援を考えました。まず、被災地の避難所での支援事例を聞いて避難所の実態を知ることから始め、発災1ヵ月後の避難所での被災者の困りごとをイメージしました。ワークを行うグループは市町単位ではなく、県内外混成の5～6名のグループで、この地域を支援するために集まったチームとして、避難所の方々に「困りごとは何か」、聞き取りに行った想定で進めました。向かった先は中学校体育館の避難所（指定避難所）と、市町内のお寺の避難所（指定外避難所）の2つです。それぞれの避難所で話を聞いた避難者の方々の困りごとを考え、その困りごとへの取組みを、誰と連携してトライしていくかを考えるワークを行いました。

- 【事例報告者】 北村育美氏（福島大学 経済経営学類「ふくしま未来 食・農教育プログラム」研究員）  
上村加代子氏（(特活)にしはらたんぼぽハウス 施設長）  
【コメンテーター】 浦野 愛氏（(特活)レスキューストックヤード 常務理事）



東日本大震災で福島県のビックパレット避難所の運営支援を実践した北村育美さん



熊本地震で運営していた障がい者施設が被災し、障がい者の避難生活、避難所運営に関わっていた上村加代子さん



東日本大震災や熊本地震など数多くの被災地で支援活動を実践してきた浦野愛さん

### 事例報告 参加者の声

- \* 現地で生の困りごとの声を丁寧に聞く大切さを改めて実感した。
- \* ボランティアしてほしいことはありませんか？という聞き方ではニーズ把握できない（回答は得られない）という話が印象的だった。
- \* 女性ならではの視点や自治組織の引き出し方、「場」作り、アイデア出しの大切さを改めて知った。
- \* 専門職がいなくても、地域・人のつながりにより、現場の力を生み出せることに気づかされた。避難所や被災者の活力を生む場づくりの重要性を認識できた。
- \* 被災した人の「中から出てくる意欲」を見逃さないことが重要、これは大切な気づきだと思いました。

## ワークプログラム2 「在宅支援を事例から学び、平時のつながりを考える」

2日目のワークプログラムでは、災害時の在宅被災者支援を考えました。1日目と同様に、まず被災地での在宅被災者支援の事例を聞いてその実態を知ることから始め、発災1ヵ月後の在宅被災者の困りごとをイメージしました。ワークを行うグループは1日目と違う組み合わせの県内外混成グループで、この地域を支援するために集まったチームとして、在宅被災者の方々に「困りごとは何か」、聞き取りに行った想定です。向かった先は古くからある住宅街と中山間集落の2つのエリアです。聞き取りの結果見えてきた「食事・物資」「情報」「心身の健康」の困りごとについて、その困りごとへの取組みを、誰と連携してトライしていくかを考えるワークを行いました。

【事例報告者】横田能洋氏（たすけあいセンター「JUNTOS」センター長）  
江崎太郎氏（YNF 代表）

【解説・コメンテーター】浅野幸子氏（減災と男女共同参画研修推進センター 共同代表）  
浦野 愛氏（（特活）レスキューストックヤード 常務理事）



熊本地震でみなし仮設支援やネットワークづくりなどに従事し、九州北部豪雨の在宅被災者支活動を行う江崎太郎さん



常総水害で被災し、外国人も日本人も“ともに助け合う”被災者の支援活動と情報発信の拠点を立ち上げた横田能洋さん



男女共同参画の視点を取り入れた被災地支援や地域防災の調査・研究を続け、各地で防災講演などを行う浅野幸子さん

## 事例報告 参加者の声

- \*避難所外の車中泊や在宅被災者は情報が届きにくい、忘れられている存在だということを改めて知った。
- \*支援が届きにくい方がいることを認識して、細やかな調査や対応をすることが大切だと感じた。
- \*同じ支援でも方法を変えるだけで全然違うことに気づいた。
- \*直接的な支援だけでなく、地元の被災した方たちの活動を支援していくという視点に気がつくことができた。
- \*「災害支援活動のゴールはどこ？」すごく印象に残った。

2日間のワークショップを通じ、支援者として、また被災当事者として、被災地での支援活動にあたってきた方々の事例を伺い、被災者・被災地の状況や困りごと、さらには支援者や活動そのもののイメージが大きく広がりました。

大きな学びとたくさんの気付き、支援に大切な視点を得て、困りごとの解決の過程を県内外の参加者が一緒に考える中で、多様な支援者がつながることの必要性を実感し、平常時の取組みを考える場になりました。事例とワークは“おみやげ”として参加者が地域に持ち帰ることができました。



## ワーク 参加者の声

- \*困りごとを解決するには複合的に連携・討議する必要があり、その効果は大きいことが学べた。
- \*みんなで知恵を出し合っどういう支援をするのかという一つの目的に向かって勉強したという充実感があつた。
- \*様々な立場(所属)の方から意見を聞いたり、議論することで、より広い視野で被災者の困りごとや支援手段をイメージ、共有することができた。
- \*アイデアの出し合いが楽しかった。市街部、山間地域、それぞれの課題、社会資源の違いを理解できた。
- \*多くの情報を、スピード感を持って対処していくことが必要とされて、大変だった。
- \*自分の持っている資源の少なさを実感し、もっとネットワークをつなげる必要があると実感しました。
- \*行政の立場として、日ごろから地域資源とのつながり、協力体勢については留意しているが、本日のワークの中でまだ不足している分野があることに気づいた。

## 参加者交流会 ～少しのきっかけを新たな「つながり」へ～

ワークプログラムでは交わることのないプレイヤーとビジター、ワークを一緒に行っていないプレイヤー同士、突然の出会いなどを通しての「つながりづくり」を目的にプログラムの一環として交流会を開催しました。事例報告者の方々や企画運営スタッフを含めた参加者が互いに知り合い、つながりをさらに深めることができ、県内外の大学生が集まり交流が実現できたことも大きな成果でした。誕生月別のテーブル分けや団体アピールタイム、参加者持ち寄りの"地元自慢の一品"も好評でした。



## 静岡県災害ボランティア本部・情報センターの訓練と情報共有会議

2日間のワークプログラムと平行し、静岡県域の災害ボランティア本部・情報センター（以下、県V本部）の訓練を行いました。県V本部は、災害時に支援から取り残される地域をつくらないため、県内全域を対象にボランティア活動の支援を行う広域拠点です。県V本部は市町の災害ボランティア活動を支援する市町支援チームを編成し、市町の状況や課題などの情報を集めるとともに、情報提供や連携促進に努めます。

訓練では、市町支援チームがワークに取り組む島（グループ）を巡回して困りごとや課題を集め、それらを県V本部で“見える化”していきました。市町支援チームは、情報収集だけでなく困りごと解決のサポートのための情報提供や連携促進の役割があることを知ってもらうため、県V本部がもつ関係団体リソース一覧や県外参加団体情報を携えて島を巡回し、連携を考えるワークの際は必要に応じて情報提供を行いました。

2日目には、県V本部の情報共有会議を行いました。情報共有会議は、県V本部と静岡県、県域で支援を行う関係機関・団体等が市町域の状況や課題を共有し、その支援方法の検討と支援者間連携を図る場です。

ここでは、情報共有会議の存在を知り市町から情報を上げることの重要性に気づいてもらうことを目指しました。会場を会議室に見立て、市町支援チームが集めた各地の課題や困りごとを県V本部・市町支援チーム、静岡県、関係団体（静岡県生活協同組合連合会、JVOAD、減災と男女共同参画研修推進センター、日本財団）が共有し、対応を協議、決定していくようすを参加者全員が見学しました。会議は、内容がわかりやすくなるよう登壇者がシナリオに沿って発言し、何が行われているのか適宜解説を入れる形で進めました。



### 参加者の声

#### ◇市町支援チーム

- \* 市町との情報交換のみならず市町間相互についても情報展開していることはわかりました。
- \* 情報共有された検討の結果がどう戻ってくるのかも見えると効果が実感できる気がしました。
- \* 各地域での情報を他の地域と共有し、支援の幅を広げていくために重要だと感じた。
- \* 実際にうまく機能するか心配。平時から連携訓練による信頼関係づくりなどが必要ではないか。

#### ◇情報共有会議

- \* お互いの情報を共有することによって事例が進んでいくことが理解できた。
- \* 情報共有会議の内容が確実に市町ボランティア本部に発信されることが大切です。
- \* 支援のぬけおちがないように、支援のリソースが最大限発揮されるように県域で情報共有する場なのだ理解した。
- \* 地域によって必要とされることは異なる。少数派の意見であっても切り捨てしまわれない情報の伝え方が必要なのではないかと思った。

## ビジタープログラム

初心者や、災害ボランティア以外のさまざまな分野で活動する団体・組織の人たちも参加しやすいよう、ビジター参加の枠とプログラムを設け、本訓練の内容や目的を理解してもらうため、災害ボランティアや図上訓練の説明、訓練見学のほか、オープン形式のセミナーを行いました。セミナーでは、被災者・被災地の多様な困りごととつながる団体・組織の取組みと連携事例を紹介し、さまざまな分野の団体・組織のつながりが広げる可能性やアイデアを知ってもらいました。プレイヤー訓練の見学にあたっては、事前にワークのねらいや内容、見どころなどを説明し、訓練会場での質疑はワークプログラム担当の企画ワーキンググループメンバーがコンシエルジュとして対応しました。

### 事例提供セミナー【**士業、行政、NPO** <sup>かける</sup> × **ボランティア**】

#### セミナー① 【士業×ボランティア】

「専門士業団体が災害時にボランティアと共にできることって何だろう？」

事例提供者：永野 海氏（静岡県災害対策士業連絡会 弁護士）

#### セミナー② 【行政×ボランティア】

「災害派遣トイレネットワークプロジェクト『みんな元気になるトイレ』で見えた新たな災害対策の取組み」

事例提供者：太田智久氏（富士市防災危機管理課 危機管理担当主幹）

石川淳哉氏（(一社) 助けあいジャパン 代表理事）

#### セミナー③ 【NPO×ボランティア】

「災害時の母子支援計画と熊本地震での支援事例」

事例提供者：原田博子氏（(特活) はままつ子育てネットワークぴっぴ 理事長）



士業の専門性と他団体との連携による被災者支援に取組み、被災者支援チェックリストを作った永野海さん



クラウドファンディングを活用し市のトイレトレーラーを購入した太田智久さんと、プロジェクト発起人の石川淳哉さん



乳幼児母子支援のためにつくった「つながる支援パック」のしくみで熊本に物資を届けた原田博子さん



#### 参加者の声

- \*事前にプレイヤー側の資料の説明、見どころの説明があったのでプレイヤー側が何を理解した上で見学にのぞめて良かった。
- \*皆さん意見を出しあっている姿がとても良かったです。次回はプレイヤーとして参加したいと思いました。
- \*士業とボランティアがつながるなんて思ってもみなかったので、とても新鮮なお話でした。
- \*“他地域へ向けた支援のための備え”という発想が良かった。子どもをつれた避難は本当に大変だと思う。
- \*同一自治体内でなんとかしようと考えていたこれまでの防災行政からの転換期かと思う。つながることの大切さを各方面で共有していきたい。

## 訓練の企画・運営

### 【第13回図上訓練ワーキンググループ】

松島一博（浜松市災害ボランティア連絡会）  
 鈴木まり子（(特活) 日本ファシリテーション協会）  
 原田博子（(特活) はままつ子育てネットワークぴっぴ）  
 福地弘倫（(社福) 小羊学園）  
 渡瀬充久（(社福) 浜松市社会福祉協議会）  
 田中正孝（サクラ工業㈱）  
 川津貴臣（(社福) 静岡県社会福祉協議会）  
 今澤正樹（M's工房）  
 松永和樹（(社福) 静岡県社会福祉協議会）  
 豊泉和也（㈱ikegaya）  
 杉浦史織（静岡県危機管理部危機情報課）  
 久保田仁美（静岡市民生委員児童委員）  
 萩原美栄子（(特活) 男女共同参画フォーラムしずおか）  
 津田和英（(特活) ホールアース研究所）  
 佐野睦実（静岡県学生ボランティア団体「うちっち」）  
 太田智久（富士市防災危機管理課）  
 仲田慶枝（西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会）  
 玉木優吾（松崎町災害ボランティアコーディネートの会）

松山文紀（震災がつなぐ全国ネットワーク）  
 頼政良太（被災地NGO協働センター）  
 福田信章（東京災害ボランティアネットワーク）  
 津賀高幸（㈱ダイナックス都市環境研究所）  
 成田 亮（(特活) 全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））  
 辛嶋友香里（(一社) ピースポート災害ボランティアセンター）  
 鶴木由美子（(特活) 難民支援協会）

### ◇オブザーバー

遠藤 翼（静岡県健康福祉部福祉長寿局地域福祉課）  
 村松恭祐（静岡県学生ボランティア団体「うちっち」）  
 橋本葉一（日本財団）



この訓練の実施にあたっては、県内外の若手を中心とした企画・運営ワーキンググループを設置しています。ワーキンググループは、およそ半年前から6回程度の会議で担当チームごとの検討と全体共有・協議を重ねながら、プログラムづくりと運営準備を進めます。

半年に及ぶワーキンググループの会議は、特に被災地支援の経験が少ない県内メンバーにとって、会議自体が学びと訓練の場であり、多様な支援者とつながる機会になっています。訓練の回を重ねるごとに、県内メンバーが中心となり企画運営を主体的・積極的に担えるようになっており、静岡県内の人材発掘と人材育成にもつながっています。

会議の開催日と参加人数

回	開催日	人数
準備会①	6月8日（木）	8
準備会②	7月5日（水）	9
第1回	7月25日（火）	18
第2回	8月17日（木）	18
第3回	9月26日（火）	21
第4回	10月23日（月）	19
第5回	12月20日（水）	23
第6回	1月9日（火）	24
ふりかえり	3月19日（月）	23



<お問い合わせ先> 特定非営利活動法人 **静岡県ボランティア協会**

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1-70 静岡県総合社会福祉会館 2階  
 TEL：054-255-7357 FAX：054-254-5208  
 E-mail：evolnt@mail.chabashira.co.jp

この報告書は日本財団の助成を受けて作成しました